

立命館大学 FD 研修会参加報告

「ティーチング・ポートフォリオをデザインする～授業改善および教育業績評価の新たな展開」

日時：2009年3月11日（水）9時30分～14時30分

場所：立命館大学衣笠キャンパス

講師：土持ゲーリー法一（弘前大学 21 世紀教育センター高等教育研究開発室）

出席者：19名（立命館大学教職員 16名 他私大 3名）

ティーチング・ポートフォリオ（Teaching Portfolio）とは、教育実践に関する記録（証拠）を集めたものである。記録には、授業シラバス、授業活動の記録、課題、試験、評価、学生の成果、学生による授業評価、他の教員による授業観察（ピア・レビュー）、教育に関する受賞など、具体的に提示できる資料すべてが含まれる。ティーチング・ポートフォリオの作成は、カナダで始まり、北米大陸の高等教育機関に広がりつつある。その効果には、①将来の授業の向上と改善、②証拠の提示による教育活動の正当な評価、③熱心ですぐれた指導方法の共有があるとされる。

中央教育審議会の答申『学士課程教育の構築に向けて』（2008年12月24日）においても、「授業改善に向けた様々な努力や成果を適切に評価する観点から、教員が教育業績の記録を整理・活用する仕組み（いわゆるティーチング・ポートフォリオ）の導入・活用を積極的に検討する」とあり、初めてティーチング・ポートフォリオに言及している。

ティーチング・ポートフォリオの最も重要な機能は、教員が自身の教育について振り返る「省察」である。ポートフォリオでは、教員自身の「授業哲学（Teaching Philosophy）」を書いて提出することが求められる。授業哲学は、授業に対する理念や考え方を意識化したもので、ポートフォリオの中核をなすものである。これは、たとえば次のような問いを念頭において記述していく。

- （1）授業で何が大切だと思いますか。なぜそう思うのですか。
- （2）学習で何が大切だと思いますか。なぜそう思うのですか。
- （3）授業の到達目標は何ですか。学生に何を学んでほしいですか。
- （4）その到達目標を達成するために、どのような授業方法をとりますか。
- （5）あなたが教えるのはなぜですか。なぜ、教えることが重要だと思うのですか。

どれほどうまく授業哲学が書けたとしても、それが実際の記録（証拠）で裏付けされなければならない。つまり、ティーチング・ポートフォリオとは、授業実践の記録に「授業哲学」が反映されているかを教員自身が「省察」したものになる。この省察が授業改善への第一歩となる。

カナダでは、提出されたポートフォリオは学部長が内容を審査して、教育業績の評価がなされる。その評価は採用や昇進に結び付くが、ポートフォリオは教員に課された義務ではない。教員が教育業績の評価を受けられる「権利」のひとつに考えられているとのことだった。

講師の土持氏は、教育面に限ったティーチング・ポートフォリオよりも、研究、教育、社会貢献の三分野にわたる「アカデミック・ポートフォリオ」を導入するほうが、日本の大学教育の現状に適合するのではないかと付け加えて、研修会を終えた。

ティーチング・ポートフォリオは、自身の教育活動を「授業哲学」に照らして意識化する有効なツールであると思う。「なぜそれを教えるのか」、「その授業方法は最適なのか」といった問いは、教えることの本質に関わる問いである。しかし、ポートフォリオを教育業績として評価することなく、ただ作成を義務化するようなことになれば、膨大な授業記録が作成されて終わるということになりかねない。その意味でも、教育業績を評価する仕組みを構築することが必要である。

さて、この研修会は午後からワークショップ形式で、ティーチング・ポートフォリオを実際に書いてみることになっていた。そのための課題が、開催のわずか 2 日前に送られてきた。何とか準備をして研修会に臨んだものの、ワークショップは行われず、課題も使うことなく、講師の一方通行の講義で終わってしまった。その点が非常に残念に思われた。